

スペイン語圏を知る本 (その77)

ネルソン・フレディ・パディーリャ著、金関あさ、ゴンサロ・ロブレド訳

『ハメス・ロドリゲス 信じる』

(実業之日本社、2015年)

評者 安田圭史

2014年6月、ブラジルで開かれたサッカーの世界カップにおいて、日本代表はコロンビア代表と対戦し、1対4で破れ、1次リーグ敗退が決定した。この試合で日本代表を幻滅させるとりわけ美しいゴールを決めたのが、コロンビア代表のエース、ハメス・ロドリゲス（以下ハメス）であった。コロンビアは準々決勝でブラジルに敗れるまで快進撃を続け、ハメスはブラジルワールドカップで6得点を挙げ、得点王に輝いた。ワールドカップで大きな成功を収めたハメスは、2014年7月、所属していたフランスリーグのASモナコからスペインの名門、レアル・マドリード（以下レアル）に移籍した。現在、ハメスはレアルでエースナンバー「10」を背負い、中心選手として活躍を続けている。本書は若干24歳のハメスが、コロンビア代表とレアルで確固たる地位を築くまでを追ったノンフィクションである。

24歳にして自国代表と世界有数のクラブチームの中心選手という、今まで順風満帆なエリートコースを辿ってきたと思われるが、決してそうではない。ハメスはベネズエラとの国境沿いにある町、ククタの中産階級家庭に生まれ、父親は地元のプロサッカーチーム、ククタ・デポルティーボの選手であった。サッカーに常に親しめる環境にあったとはいえ、ほどなくして両親が離婚し、ハメスは父親と離れて生活することになった。彼を育てる母親は、サッカーで頭角を現し始めた我が子のためもあって、すぐに再婚した。ハメスの母親と継父は、サッカーの練習や遠征などで莫大な費用がかかる息子にできる限りのことをした。特に母親が仕事の合間を縫って、バザーやエンパナダス（ミートパイ）の販売などを頻繁に行い、お金を集めたのは並大抵の苦勞ではなかったであろう。

ハメスはコロンビアの複数のチームに在籍した後、南米の一流のサッカー選手が一般的に通るとされるルートを辿った。それはアルゼンチンやブラジルの有力チームを経て、ヨーロッパの一流のチームと契約するというものである。

ハメスは17歳のとき、アルゼンチンのCAバンフィールドに移籍した。当初、慣れない異国での生活に苦勞したハメスであったが、エンジニアであった継父が転職し、母親と妹とともに一家でアルゼンチンに移住したことで、よりサッカーに集中できるようになった。そうしてチームの中心選手に成長したハメスの活躍もあって、CAバンフィールドは2009～2010年の前期リーグでチーム初めての優勝を果たした。

その後、2010年7月にヨーロッパへの扉が開かれた。ポルトガルの強豪のFCポルトと契約したのである。FCポルトではリーグ戦3連覇に貢献した。2013～2014年シーズンにはさらなるステップアップとして、フランスリーグで優勝7回を誇るASモナコに移籍した。このとき、ハメスは世界のサッカー界における若手選手の中では特に注目される存在であったが、彼への評価を揺るぎないものとしたのは、ブラジルワールドカップでの活躍であった。そのワールドカップの最優秀選手（MVP）は、アルゼンチンの準優勝に貢献した現在世界最高のフォワードとされるFCバルセロナのエースストライカー、リオネル・メッシであった。しかし、アルゼンチンを1986年のメキシコワールドカップ優勝に導いた世界的スター、ディエゴ・マラドーナは、「今大会のMVPは、ハメス・ロドリゲスとするべきだった」と発言し、ハメスの活躍を賞賛した。

ハメスとメッシには共通点がある。両者とも元々身体的に恵まれておらず、上背がなかったため、幼少期からホルモン療法が施されたことである。結果的に現在の屈強な体がつくられた。いくら高い才能を持ったサッカー選手といっても、こうした周囲の尽力や家族の援助なしには、誰もが認める超一流の選手にはなれないのだということを、本書を通して痛感させられた。

やすだ けいし（龍谷大学経済学部専任講師・
スペイン現代史、イスパニア語学科2000年度卒業）